特集

ここでしか伸ばせない力がある

みなおしたい、4つの「技能」教科

音楽・図工・家庭・体育の4教科だからこそ伸ばせる子どもの力とは、果たしてどんなものでしょうか。
今回は、これら4つの教科の重要性と指導のポイント、次期学習指導要領で求められていることを、教科ごとに解説していきます。

取材・文●甲斐ゆかり（サード・アイ）、金丸敦子　イラスト●あきんこ

「社会に開かれた教育課程」とは

次期学習指導要領は、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指しています。

これは、学校が社会と接点をもちながら学ぶことができる環境を作るということです。具体的には、教育課程の実施にあたって地域の人材や資源を活用したり、放課後・土曜日を利用して社会教育との連携を図ったりすることがあてはまります。

今後は、学校教育を学校の中だけで終わらせずに、社会と共有・連携しながら教育目標を実現させることが期待されています。即ち、教育課程自体が社会の変化を柔軟に受け止めるものになっていることが求められているといえます。

実社会や実生活に関連した課題を通じて、子どもたちの学びへの興味や努力し続ける意志を高める必要があるのです。

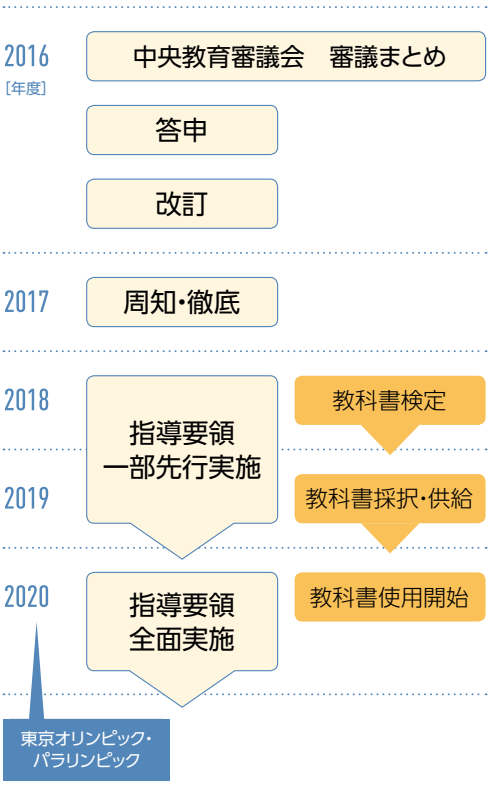
4教科の特長を生かせば指導に幅と深みが生まれる

国語や算数などと比べて授業時数の少ない音楽・図工・家庭・体育の4教科ですが、それぞれにぜひ知っておきたい指導上の要素が数多くあります。

共通しているのは、子どもの生活場面に近い学習事項が多いことです。例えば家庭科は、子どもの日々の生活に直結する衣食住を学習分野としていて、家族関係や消費者としての知識を得ることで、日常生活に役に立つことを実感しやすい教科です。体育は技能の習得を通して、体の動かし方・人との付き合い方が、図画工作と音楽は生活を楽しく豊かにするための想像力や表現力が身につきます。

次期学習指導要領では、ある教科で学んだ資質・能力をほかの教科にも生かす場面が求められます。これら4教科のもつ特色をよく知ることで、新たな指導の

今後の学習指導要領改訂スケジュール（小学校）



[中央教育審議会資料（2016年8月）]

次期学習指導要領 改訂の方向性

4教科で育成を目指す 資質・能力

音楽

①曲想と音楽の構造との関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身につけるようにする。
②音楽表現を工夫したり、楽曲や演奏のよさなどを見出しながら音楽を味わって聴いたりする力を育てる。
③音楽活動の楽しさを味わい、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、豊かな情操を養う。

図画工作

①対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表したいことに合わせて材料や用具を使い、表し方を工夫する創造的な技能を身につけるようにする。
②造形的なよさや美しさ、表したいことや表し方などについて考え、創造的に発想や構想し、自分の見方や感じ方を深め、味わう力を育てる。
③つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造する態度と豊かな情操を養う。

家庭

①日常生活に必要な家族や家庭、衣食住、消費や環境などについての基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身につける。
②日常生活の中から問題を見出して課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う。
③家庭生活を大切にする心情を育み、家族や地域の人々との関わりを考え、家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う。

体育

①各種の運動の特性や魅力に応じた行い方及び身近な生活における健康についての理解を図るとともに、基礎的な動きや基本的な技能を身につけるようにする。
②運動や健康についての自己の課題に気づき、その解決に向けて思考・判断し、他者に伝える力を養う。
③運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。

[中央教育審議会資料(2016年8月)をもとに作成]

学習指導要領 改訂の方向性

▼何ができるようになるか

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性の涵養

生きて働く
知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

▼どのように学ぶか

学び
- 主体的
- 対話的
- 深い

＊「何を学ぶか」については教科・科目等の新設や目標・内容の見直しが行われます。学習内容の削減は行わない方針です。

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と学習評価の充実

[文部科学省:次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて(2016年8月)]

視点が得られる可能性は大いにありそうです。

次期学習指導要領では技能教科の視点がより重要に

次期学習指導要領では、各教科の学習において、その特質に応じて育まれる見方や考え方を働かせた学びを行うことを目指しています。また、各教科同士の関連性も視野に入れながら、資質・能力を育成することも求められています。さらに、「総合的な学習の時間」や「特別活動」、「特別の教科 道徳」などとの連携を図ることも必要とされています。

このように、2020年度からの学校教育は、多様な要素が相互に働き合いながら総合的に進められていきます。前述のように教育課程は地域・家庭との連携・協働によって進められます。育成すべき資質・能力については全体で共有し、学校以外の多様な教育活動の機会は地域・家庭から協力を得る必要があります。

これら4教科は、国語・算数・理科・社会とは異なる学びへの視点や子どもの感性、生活感覚に響く要素をもっています。それらの特徴を理解し、よさを最大限に生かすことが、日々の指導をより深く、充実したものにしていくことにつながります。

次のページからは、4教科のカリキュラム編成・指導に深く関わる先生方に、各教科の特質や効果的な指導法についてうかがったことをご紹介していきます。

東京都小学校音楽教育研究会
『音楽授業研究の会』顧問
渡邊麗子先生
Reiko Watanabe
小学校音楽専科としての経験を経て、現在は授業研究の講師やNPO法人「特別支援教育研究会未来教室」の講師を務める。

音楽

音楽科の授業で子どもは生き方を学ぶ

音楽科は生き方・学び方を学ぶ教科

音楽科の授業では、〝より高い音楽性を子どもが主体的・創造的に獲得していく道筋〟を通ることが必要です。さらに、そこで身につけた主体性・創造性を発揮しながら学習する、音楽科の授業を実践していかなければなりません。

その道筋は、〝人として、主体的・創造的に生きる力を身につけるプロセス〟と同じことなのです。

自ら進んで音楽にかかわる能力を育てる

では、一人ひとりの子どもが、自ら進んで音楽にかかわる能力を育てるために、何をすればよいのか。それは、音楽に向かう態度を育てることです。態度を育てることによって、いずれ、態度が能力として定着すると考えています。

①音を聴こうとしていますか。（音を聴く耳）②よい音を出そうとしていますか。（音楽を感じる心）③「心・息・音」を合わせようとしていますか。（音楽で表現する力）と、いつも子どもに問いかけることで、これらを意識し、態度が身につきます。

例えば、音を聴こうとする態度は、いずれ、様々な音の種類や働きまで聴き取ることができる能力へと変わります。小さいころから育てたい基礎・基本です。

このように音楽に向かう態度を丁寧に育てることは、人間としての生き方・学ぶ姿勢を育てることにつながります。

課題解決学習のプロセスを学ぶ

▽〝音楽科の学習のプロセス〟参照

毎日の音楽活動の中で、子どもがひとり歩きできるようになってほしいと願っています。そこで、音楽科における課題解決学習についてお話します。

今日の学習の①行き先（目的）を確認。必ず②音楽の手がかり（例：旋律の変化）を持たせ、③行き方（方法）を自分で決めて追求する。④低学年から小さい山（課題）を教師と一緒に登り始め、少しずつひとり歩きの経験をさせる。⑤試行錯誤の時間を十分に確保し、考えたことを音で確かめる。⑥音楽の価値をひとつ見つけ、その先の課題を捉える。

このプロセスを経て感動を共有し、成功体験を味わうことで、主体的・創造的に音楽活動ができる子どもになります。

「考える力」と「強い心」を高める時間

課題解決学習の中で、試行錯誤の過程は、子ども自身が「考える力」を高める大事な時間です。表現活動の例を挙げます。

今日の課題に沿って、表現の工夫をしている途中の音楽を少人数で聴き合います。そこで、自分と他人の音楽表現の違いに気づき、これをことばで整理します。その違いの中から、今の自分に足りないことを受けとめて、再び課題解決に向かいます。子どもにとって厳しい試練の時ですが、「強い心」が育ちます。

教師がこの考えるプロセスを評価していくと、「考え続ける力」を発揮する子どもになります。さらに、ことばで説明できることは、学んだことをはっきりと理解しているので、自分の考えをもってコミュニケーションできる子どもに成長するのです。

音楽科の学習のプロセス

1 音楽で課題提示
楽曲を聴いて全体を直観する

↓

2 学習課題の把握
教師と子どもが同じ課題をことばで共有する

↓

3 試行錯誤
手がかりをもって
繰り返し聴く・表現する（一人で）
⇨思いや意図が明確になる

発信する・共有する（グループで）
⇨学び合い認め合う

↓

4 課題解決
楽曲の価値をひとつ見つけて、その先の課題を捉える

兵庫教育大学理事・副学長
福本謹一先生
Kinichi Fukumoto
専門は美術教育学。
教育課程部会芸術ワーキンググループ主査。

図画工作

見栄えのよさや作品としての優秀さだけでなく発想する力やプロセスを大事にしてほしい

子どもの思考を広げ、引き出す「言葉がけ」の大切さに気づきたい

私は、子どもは本来、新しいことを自分で考えることができる存在だと思っています。それを充分に引き出せるかどうかは、先生方の働きかけ次第です。

特に大切なのは、言葉の投げかけ方です。例えば子どもに「すてきなメガネを作ろう」と提案するとします。するとほとんどはレンズが二つある一般的なメガネを思い描いてフレームだけ変わったメガネを作ろうとします。でも、ハチマキのようなバンドにいくつも穴が空いていて、セロファンで色のついたレンズや、紙コップを使った望遠鏡があったりして、それをぐるぐる回すと見え方が変わるメガネを考えてもいいはずです。皆さんならどのような言葉がけをしますか。

また、12月に「クリスマスにサンタさんは何をしているか、描いてみよう」と課題を出せば、子どもたちは、赤い服を着てそりに乗り、プレゼントを届けるサンタクロースの絵を描くでしょう。一方、同じテーマを7月に投げかけたら、「南の島でバカンス中」や「短パン姿で洗濯物を干している」など、色々な姿のサンタクロースが登場するかもしれません。

このように、投げかけ方ひとつで、子どもの思考は限定されることもあれば、大きく広がることもあるのです。

見栄えのよさや技法よりも主題をもって表現する態度を大切に

芸術分野では、いまだに技能の習得だけを目指す授業が存在しています。

そのような指導のもとでは、「大人受け」するような見栄えのよい作品が高い評価を受けることになり、子どもがどんな思いをもって描いたのかを重視する「表現学習」がほとんど行われません。

本来なら、うまく描くことよりも、どんな思いで描いたのか、その主題を表すためにどんな表現上の工夫をしたのかに指導の時間を費やすことが必要です。子どもたち自身で主題を考える経験が多くできるようにしてほしいと思います。

朝の始業前の時間に、休日の出来事など、自分の描きたいことを絵に描く時間を設けてもよいでしょう。それは、子どもたちが主題を見つけて表現する経験になると同時に、先生方がその子の絵の表現の発達や、性格、生活の様子を知る手がかりにもなります。

芸術分野の位置づけが豊かになれば学校の文化的風土もより豊かになる

図工は、感性や想像力を育む教科です。集団の中で、内面の世界を言語以外の手段で表現することで、感性や想像力が育ち、子ども自身がそれに気づくことができるのは、図工ならではです。さらに、学校の文化的な風土や環境にプラスの効果をもたらすという特徴もあります。

先生方自身も柔軟な心をもって、自分がやろうとしている学習が全体のカリキュラムでどのような位置づけをもち、どのような力を育てていこうとしているのか意識することが大切です。

「主体的・対話的で深い学び」の実践例

●「美しい木の形」の活動

①２つ折りにした紙の背の部分を切って開くと木の形になる切り紙を作る。子どもたちに「一枚、木に見える形に切り抜いてください」と指示をする。

②できたら黒板に貼り、全員が貼り終えたところで、どんな木の形ができたかを相互に鑑賞する。

③②を３回繰り返す。２回目以降は「周りの友だちの活動も見ながら、違う形のものを作りましょう」と指示を出す。鑑賞の際は、最初の作品と違う点について指摘し合うように働きかける。第１回から第３回と表現を追究することで、発想の広がりが期待できる。

◀第1回

◀第2回

◀第3回

相互の作品を鑑賞することで競争意識（自分の作品へのこだわり）が生まれ、新たな技法の発見や発想の広がりが生まれる。完成形が必ずシンメトリーでバランスのよいものになるため、子どもが苦手意識をもたずに取り組むことができる。また、繰り返し表現を追究することで、深い学びが実現し、失敗をチャンスに変える機会が保障される。さらに多面的に表現する力が自分にあることや、皆と協力することで豊かな発想が生まれることに子ども自身が気づき、主体的な学びを喚起する。

東村山市立回田小学校校長
曽我部多美先生
Tami Sogabe
全国小学校家庭科教育研究会会長。
教育課程部会家庭、技術・家庭ワーキンググループ委員。

家庭

各教科の学びを具体的な力に変える「窓」になるのが家庭科です

習ったことがすぐに実践できるのが家庭科の魅力

家庭科は、人の生活の営みに関わる、様々な生活事象を学習対象とした教科です。そのため、子どもたちにとって、学習したことが家庭ですぐに実践でき、実際の生活に役立てられるのが家庭科の特徴で、他教科に比べ、学びが実感しやすい教科だといえるでしょう。

全国小学校家庭科教育研究会の5、6年生への全国調査によると、約90％の子どもが家庭科が「好き」で、「今の生活に役立つ」と答えています。理由として挙げられるのは、「調理の基礎が学べる」、「生活に役立つことが学べる」です。

例えば、包丁は正しく持たなければケガをするし、食材もうまく切れません。洗濯も、きれいに洗うには手順やコツがあります。

そういったことが学べる家庭科に魅力を感じているのではないかと思います。

目標や目的を明確にすることが創意工夫する力を育てる

家庭科の指導で最も時間が必要だと教師が感じているのは、技能の定着を図ることです。子どもに「できるようになった」と自信をもたせるためにも、個別指導や家庭との連携を有効に取り入れています。その際、「布を印にそって縫う」、「野菜を同じ厚さになるように切る」など、具体的な目標や規準を設定すると、子どもは学びやすくなります。

家庭科はまた、創意工夫する能力を育てるのに有効な教科です。例えば手提げバッグを作る場合、子ども自身がどんな用途で使いたいのかを考えれば、いろいろな作品ができます。調理も同様に、食べる相手を考えて、どんな料理を作るのかを決めれば、材料を切る大きさや加熱時間が変わります。

家庭科ではこのように、相手意識、目的意識をもつことと、次の活動に生かしていくための振り返りが大事です。

生活に密着した家庭科は他教科の学びを広げる

家庭科は生活の営みそのものの教科だからこそ、他教科と関連させることで、学びを広げていくことができます。

例えば買い物。野菜の値段が毎日違うことに気づきます。「なぜだろう」と疑問をもつことで、農業生産や流通の仕組みの理解につながり、他教科の抽象的な学習内容を生活から具体的に学ぶことができます。

別の例として、「ご飯とみそ汁」という日本の伝統食。「味噌はいつごろから食べられていたのか」などに広げていくことで、歴史への興味を喚起することもできます。

学習した知識を定着させるには、実際の生活場面と関連させることが効果的です。各教科の学びをより具体的に活用する力に展開していくための「窓」になるのが家庭科だと思います。

小題材の実践例

●買い物名人になろう

消費生活の中で安全や環境への配慮にもっと目を向けさせ、食品の購入の疑似体験を通して必要な情報を収集し、それを基に適切に判断する力、意志決定能力を育成する。

①今日のめあてと学習の流れを知る。

- 加工食品の選び方を考えよう

②自分の家庭では、加工食品を選ぶ時にどんなことに気をつけているか発表する。

③Webで加工食品（ここではベーコン）の情報を集め、ワークシートに書き出す（価格や品質など）。

④班で集めた情報を共有し、情報を発表し、板書する。

⑤情報をもとに複数の商品から１つ選び、その商品を選んだ理由をワークシートに書く。

⑥商品ごとに、選んだ理由を発表する。

⑦今日の学習でわかったこと、これからの買い物に生かしたいことをワークシートに書く。

※「小題材の実践例」の参考：
「小学生向けWEB版消費者教育読本」（東京都消費生活総合センターホームページ）

筑波大学体育専門学群教授
岡出美則先生
Yoshinori Okade
専門は体育科教育学。
主な研究テーマは体育科のカリキュラム論、
スポーツの教育的可能性。
教育課程部会体育・保健体育、健康、
安全ワーキンググループ委員。

体育

専門性よりも「初心者」の目線で子どもの実状にあった指導を

生活環境の変化で高まる体育の授業の重要性

かつての子どもたちは、遊びの中で自然に体の動かし方を獲得していました。ところが、最近は普段の生活の中で自分の可能性を探り、広げていく機会が少なくなっています。

例えば、ジャンプには、直前に一度沈み込む動作が入ります。ボールを投げるのも同じです。いったん腕を後ろに引っ張り上げ、足を一歩引いて身体を開き、腰を回転させる動作が必要です。

こうした動きはかつて友達のまねをして身につけていましたが、今は意図的に教える必要があります。その意味で、いろいろな動きを意図的、かつよい指導条件のもとで提供するプログラムとして、体育の授業の重要性が高まっています。

子どもの発達状況に合わせ学習時期や内容を工夫することが大切

例えば跳び箱が苦手な子どもに指導する場合、怖さを軽減しようとして段を落とすことがよくあります。しかし、手を着く場所が低いと、怖さは逆に増します。このように、よかれと思ってやったことが逆に作用することは珍しくありません。子どもたちがどこでつまずくのか、充分に考えて授業を行う必要があります。

また、子どもの発達段階に合わせて時間数を適切に配分することも大事です。中学生を対象にした実験では、バレーボールを中1で20時間、中2で20時間、中1と中2で各10時間の計20時間教えるパターンの中で、最も力が伸びたのは中2で20時間を配当した場合でした。これは空間認知の仕方が年齢によって制約を受けるためです。

体育の学習指導要領は2年単位で指導内容が示されています。ですから、その間で子どもの実態に合わせて配当時間数を変えることが可能です。授業を「行う」ことだけに重点を置くと、能力を充分に伸ばすことができず、子どもも自信をもてなくなります。最近は当たっても痛くないボールなど、発達状況に合わせた道具が開発されています。それらを上手に利用して、上達を実感できる時間を確保し、指導することが大事です。

名選手は名コーチにあらず苦手だからこそよい指導ができる

体育が苦手な先生の中には、中学校・高校の専科の先生のほうがよい指導ができると思う方もいるかもしれません。しかし、小学校の先生のほうが、子どもへの伝え方や声かけ、ほめ方がうまく、子どものやる気を引き出す力は高いといえるでしょう。

体育は、「できないから教えられない」教科ではありません。トップ選手を育てるコーチは、自分ができないことでも「こうすればできるのではないか」と考えて選手を指導し、結果を出しています。「できる」よりも「できない」ほうが、どこでつまずくかがよくわかり、よい指導ができるのです。

効果的な指導の実践例

●リレーのバトンパスを練習する

個人のスピードが違うと、バトンを受けるために走り始める距離が変わってくる。そこで遊びの要素を入れ、ペアでバトンパスのイメージをつかむ。

①ラインを何本か引き、スタートする場所を変える。どこから走ればゴールに入る前に前の子にタッチできるか、どこまで距離を伸ばせば追いつけるか、人の組み合わせを変えてやってみる。

➡前の子に追いつくためのスピードを体感できる。

②前の走者がラインまで走って来たら次の子が走り始める形で、追いつけるかどうかをやってみる。タッチできたら1点とし、ポイントを競うゲーム形式にする。

③イメージがつかめたら、スピードに乗りながらバトンを渡せるかどうかをチームで試す。

＊持ちタイムの合計から何％縮めるかを設定させる。
＊ゴールした順位ではなく、設定時間にどれだけ近づけたかを競う。